

ご挨拶

高阪 薫

人間科学研究所の森先生が、先生も戦争体験者の一人であろうから、二〇分与えるので話して下さいということになっております。私は時々みんなから「先生の話は長い」と言われます。私は決して長くてつまらない話をしているつもりはないんですけれども、ついつい調子に乗るところがあります。二〇分ですので、一時二〇分で終わりたいと思うので、時計を前に置いてお話しします。

私の戦争体験の記憶ということで、話してみます。私も戦中生まれでして、神戸で空襲を経験しております。後ほど神戸空襲を語る会の中田さんのお話にも出てくると思いますが、少し重なるかもしれません。

しかし考えてみれば、私は戦争をした経験はありません。私は生まれてから戦争に加担した経験はありませんが、結局巻き込まれているんですね。神戸空襲のとき五歳の私は何かなんだかさっぱりわからないまま親に連れられて、西神戸の脊梁、つまり月見山に向かって天井川沿いに逃げました。焼夷弾が雨嵐のごとくバラバラ落ちてきて、絨毯攻撃と言うんでしょうか。後から記録を見ますと、B 29 が昭和二〇（一九四五）

年三月一七日の未明、三〇六機飛来しているんですね。落した爆弾は、主に焼夷弾です。焼夷弾というのは落ちたらすぐ発火するものです。日本の家屋が主に木材でできていますから、火事を起こして広がっていく。だから、その町は火の海になる。月見山の上にほうに逃げて、だーっと西神戸が本当に火の海になっている状況を見ました。

それが三月一七日ですが、もう一つ神戸の大空襲で忘れてはならないのは、東神戸を中心にした六月五日です。結局、記録によると昭和二〇年一月三日から始まった神戸の空襲は、八月一四、一五日まで、つまり終戦まで続いているんですね。その間、B 29 は一二八回飛来してきているんです。二日に一遍は空襲だったということです。

その後朝鮮戦争やベトナム戦争、最近はいラク戦争がありますが、人類はどの年をとっても戦争ばかりです。私は戦争はしないし、戦争は反対だし、平和志向の人間でいますけれども、結局皆巻き込まれるんです。戦いをしたくない、しない、婦女子なんかは非戦闘員ですが、それが巻き込まれる。ただ、非戦闘員は被害者ばかりであるかと言ったら、そうでもないですね。日本の場合は「銃後の守り」と称して、婦女子が戦争に協力することもありました。子どもたちも中学生や女子学生は工場に駆り出されて弾を作ったり、兵器の部品を作ったりして、わからないまま協力している。

いづれにしても、私は五歳でしたから、兵器も作らず弾も磨かず、親に手を引かれて逃げまどった。そのときに、今でも頭の中にあるのは、雨嵐のごとく焼夷爆弾が降り、毛

布をかぶって逃げた女性が焼夷弾に当たって、ギャーと悲鳴を上げた記憶が残っている。頭の片隅から離れない。ただオドオド逃げ廻るだけでした。

それから、未明に空襲警報が解除されて帰ってきたら、私の家はかるうじて三分の一ぐらい焼けて残っていました。うちの母親は既に鬼籍の人ですが、その時は泣いて喜んでいました。ほかはみんな焼けていた。なぜ残ったかと言ったら、おじいちゃんが、家の中にあつた防空壕で頑張っていて、バケツで水をかけて消したと言うんです。おじいちゃんは少し火傷していましたけれども。そんな家が三分の二残っているんです。そのあと住めるようになったんですけど、ただ、もう怖いから、その後一家あげて津山に疎開しました。ですから、六月五日の東神戸の空襲体験はしていません。

そんなことを一つ一つ細かく話をするときだけで時間が過ぎてしまいます。私は近代文学のことを研究していますので、例えば野坂昭如ですね。これは皆さんご存じのように『火垂るの墓』で直木賞をとりました。彼の『火垂るの墓』を読んでみますと、私の幼少時代の空襲体験がまざまざ浮かび上がってきます。少年は一四歳の中学生。神戸の中学校で、妹がおりまして、四歳の節子というんです。それが私だと思っただけです。悲しいことに節子は防空壕体験もしますし、ひもじい生活をしますし、やがて飢餓、栄養失調で亡くなってしまふ。その二人の兄妹の物語です。もし親がいなかったら、私も同じようなかたちで、昭和二〇年に命が終わっていたかもしれないなと思うときもあります。

『火垂るの墓』はアニメにもなりましたし、テレビドラマ化されたり、映画にもなりました。それを読んだり、見たりしておきますと、哀切極まりない。いつも涙なくして読めないし、見られない。実際、あの本はベストセラーになって、今も読まれておりますし、テレビでも映画でもヒットしました。そういうことで戦争の記憶は語り継がれているんだなと思ったりします。

しかし、あの映画にしてもテレビにしても、あれが世界で上映されたらどうという反応を示すかということです。二〇〇四年の戦後六〇周年を記念してつくった、日テレがやったテレビドラマでしたか。それ以前でも、あのアニメはわりに韓国でもよく見られてたんです。そのときの反応は、「あれは被災者を美化しすぎている」と言うんですね。お涙ちようだいものになりすぎている。これは私は、けしからんなと一方で思いながら、なるほどそうかなと思ったりもするんですね。いろいろ批判がありまして、日本の戦争を知らない世代でも、「あれはあまりにも悲しい。あんなのが現実か。少し美化しすぎているんじゃないか」と、そんな話があります。イギリスのある映画雑誌では、落ち込む映画のベストテンの第六位に入っていたこともあります。あれを見たら確かに落ち込みますよね。それほどショックを与えています。

テレビやアニメで被害者からの現実を訴えた映画が外国で上映されるとそれぞれ批判をされたり、痛切な共感を持って見られたりするわけですが、戦時被害を被った中国や韓国では、映画は被害者を美化していると言われる、あるいは

は非常に落ち込む外国の方々がいるということはちよつと考
えなければいけないだろうなと思います。しばしば私たちは、
ああいう映画を見たときに、主人公に没入して背景や、加害
者の存在をふつと忘れてしまふんですね。よく考えれば映画
上での被害者が実は加害者であったんじゃないかと思うん
です。『火垂るの墓』の一四歳と四歳の兄と妹は、加害者の観点
からは確かに見られません。だけど、映画になって、四〇年
も五〇年もたつて見たときに、私が節子みたいな年齢と同じ
ときに、同じ私も被害者だったと言って感動して見ているん
ですが、これは外国に行つたら通じないですね。

私はいろいろ外国で教えてきました。その中にタイのチュ
ラロンコン大学があります。日本の近代文学の中で『火垂る
の墓』はわりに読みやすいし、わかりやすい。「日本の戦争の
現実はどうだった」と言つたら、彼らもよくわかってくれま
す。ところがですよ、学生を連れて『戦場にかける橋』で有
名なカンチャナプリークウエー川と一緒に旅行しました。あ
そこは当時はビルマ国境ですかね。ビルマとタイを結ぶ橋で
す。そこでオーストラリア、ニュージーランド、イギリスの
兵士が日本軍の兵隊によつて捕虜になって、働かされるん
です。映画の場面もそういうところがあります。一万数千人が
捕虜になって、あの橋の建設に協力する。

日本軍はそのとき大変な仕打ちをしているんです。そこで
死んだのは、マラリアが原因です。病死がほとんどですが、
実は餓死もある。結局、虐待されて死んだ。実際に銃殺した
りという事件はないにしても、収容所の中での病氣と栄養失

調で一万数千人死んでいるんです。その墓地があるんです。
日本人観光客はあまり訪れません。ほとんどカンチャナプリ
ーの戦場にかける橋を渡っている汽車に乗って楽しんでる。
「ああ、これが日本軍がつくつたものか。戦前にこんなことを
やっていっただね」。つくつたのは日本軍と死んでいった捕虜
です。あるいはタイ人です。タイ人の学生に、「先生、これを
見てどう思われますか」と言われました。たとえば、私は戦
闘しません、加担したこともない。被災者だと言つたりしても、
「先生それ、どう思われますか」と言われたら、日本の民族の
血を引いている私は、途端に答えに窮して反省せざるを得な
いわけですね。ああ、そうかということになります。

墓地は六〇センチから七〇センチ四方で一つ一つ、一万基
あるんです。そのときもそうなんですけども、オーストラリ
ア人がイギリス人かわからないですけど、かなりの高年齢の
親が花束を手向けていた。一つ一つ見ていったら、文字に「自
由と平和のために戦う」と書かれているんです。「自由と平和
のために」。あるいは「自由とヒューマニズムのために」、そ
ういうふうな墓標なんです。

それで私は、日本の兵隊はどういう意味で戦つたのかと疑
問に思つたわけです。日本人の兵隊が自由と平和、あるいは
人類愛のために戦いましたか。私は日本の戦争を肯定するも
否定するも（私は否定の側に立ちたいですが）、日本の戦争の
目的がちよつと違ったのではないか。二〇歳の墓標に書かれ
ている「私は自由のために」ではなくて、日本は「天皇陛下
万歳」とかね。本当に「天皇陛下万歳」と言つて死んだ人は

実際少なくなくて、死ぬときは「お父ちゃん、お母ちゃん」で亡くなったのが現実らしいですけど、何のために戦っているか、アジア解放とか聖戦とかいったけれどさっぱりわからない。そして、今日日本が置かれている現状も、戦争は先制攻撃が大事だなんて言っているその意味はいったい何なんでしょうか。好戦性を人間のサガ、本能と思っただけじゃない。

毎年毎年世界中で戦争が起こっていますけれども、戦争は人類最大の公害であり、地球撲滅の暴挙です。戦争の責任は、加害者も被害者も、人類が背負わなければいけない。あれは仕方がなかったと逃げてはいけません。人類が背負い続けた負の遺産を払拭していくように努力しなければいけない。そういうふうに私は思います。

私が三四、五歳のときに書いた『沖繩―或る戦時下抵抗』（麦秋社、一九七八年）という本があります。今は絶版になって売っていませんけれどもね。あの二〇数万人の沖繩の被害者が出ている中に、戦争に反対した人がいた。私は沖繩の芸能とお祀りの研究をやっておりますが、そういう人がいると聞いたので、急遽並行して調べて、こういう本を書いたんです。やっぱりえらい方ですね。他方で一番、皇国民として沖繩があの戦争に協力しているんです。そして一番ひどい目に遭ったんです。二〇数万人の死者。しかしながら人類愛のためにというか、「汝殺すことなかれ」という聖書の精神に基づいて反戦運動をして、体制に巻き込まれないでずっと日常の中で静かに戦った当山昌謙という人がいた。その生涯を書いたんです。そういう人に将来の人類の生き方のあるべき姿を見出

すことができるんじゃないかと思ひ書きました。

時間ですので、これで終わりにします。これからのシンポジウムは私より専門家の方々が研究なさったことをご報告いただいで、有意義な会になると思います。どうぞ最後までご静聴くださいませ。有難うございました。